



巻頭言

日本化学会の速報誌を知っていますか？



檜山爲次郎 Tamejiro HIYAMA

中央大学研究開発機構 機構教授, Chemistry Letters編集委員長

速報誌 *Chemistry Letters* (CL) が誕生したのは1972年、敗戦に自信喪失していた我が国が東京オリンピックや大阪万博を経てようやく経済的に世界と肩を並べるほどに回復した頃です。当時欧米の雑誌に投稿すると郵送に往復2週間ものハンディがあるうえ不公平な審査に泣くことが多かったので、向山光昭先生を初代編集委員長として自前の雑誌を創刊したのです。しかし、欧米一辺倒の意識は強く、研究者の大部分は、よい論文は欧米誌に投稿して海外の主要研究者に認知してもらいたいのが本音でした。

この傾向はいま一層強くなっています。雑誌の impact factor (IF) が昇進、各賞選考、研究費、給料の査定に関係するからです。野心的な研究者はIFの大きな雑誌を目指し、IFの大きい論文はますます大きくなり、雑誌間格差は増大しています。CLは、掲載論文が欧米で高く評価されているのに、IF 1.4にすぎません。投稿数も減少傾向です。CLの論文を引用すれば審査に不利と思われるフシがあり、引用がいっこうに高くなりません。日本人著者が自分の論文も友人のものも引用しない結果でしょうか。

一方、学術会議では、税金を投入して行われた研究成果が海外雑誌に掲載されている現状が国益を損なっていると議論になっています。良い論文をいかに国内雑誌に呼びこむかが焦眉の問題です。これに対しCLでは、審査で評価の高い論文をEditor's Choiceとして青帯で目立たせ、「化学と工業」でも紹介しています。昨年はクロスカップリング特集を企画して国内外に投稿を呼びかけ、鈴木章先生のHighlight Reviewをはじめ65件の論文が集まりました。今後は、新学術領域研究のグループ研究代表者に当該分野が発展している様子をCLでレビューしてもらい、関係研究者には、論文著作時にこれを引用してもらう仕掛けを広めてゆきます。また、CL掲載論文に引用されている論文の著者に、自分の論文がCLで引用されている旨伝えてCLの存在を世界中にアピールしてゆく計画です。

以下は私見です。注目すべき内容の論文なら、よく読まれて評価の高い雑誌に投稿することは研究者の野心を満足させるものでもあり、大いにやればよいでしょう。しかし、そのほかの論文は *Chemistry Letters* で十分です。投稿・査読・出版の電子化によって不利は全くありません。さらに、投稿料の無料化、投稿者が納得する審査を丁寧にして投稿のリピーターをつくる努力、いったん掲載されたら世界中の誰でも無料でアクセスできるオープンアクセス化など、編集委員と事務局が知恵を絞り努力しています。やがては…内容に真に自信のある論文こそ速報誌に投稿するようにしませんか？ 日本化学会の速報誌に必ず目を通さないと化学の進歩に遅れる、と各国の研究者を危惧させるのに一役買いませんか？ 今なら、それができるポテンシャル十分と信じています。皆さんの意識をちょっと切り替えるだけで。これこそ我が国研究者の心意気であり、見識というものです。

© 2012 The Chemical Society of Japan